



編集・発行

● 宮崎県立図書館

〒880-0031 宮崎市船塚

3丁目210番地1

TEL 0985-29-2911

FAX 0985-29-2491

ホームページ

<http://www.lib.pref.miyazaki.jp/>

「春宵十話」に思う



宮崎県教育研修センター

所長 本田 建次

今年の読み始めに数学の研究者であった岡潔氏の「春宵十話」を再び手にした。これを初めて読んだのは今からもう36年も以前のことになる。

「春宵十話」の初版は昭和38年のことで、すでに41年が経過する。当時のわが国は数年後にやって来ることになる高度経済成長期を前にして、ある意味では社会全体が活力にあふれていた。家庭にテレビが入り、人々は物を買うことに走る。その一方では、日本人の心の荒廃が指摘されはじめた時代でもあった。

岡潔氏は「春宵十話」執筆の動機について、「近ごろのこのくにのありさまがひどく心配になって、とうてい話しかけずにはいられなくなったからである。」と述べ、教育を通じての情緒の涵養を力説している。岡氏の心には社会全体にみられるモラルの欠如、青少年の犯罪の増加などに対する危惧があった。

時を隔てた今日のわが国の社会や青少年のありようを見ると、もし岡氏が存命なら、それは氏の目にどのように映ったであろうかと思わずにはいられない。長期化する経済の低迷、情報通信技術の進歩に伴う情報の氾濫など、今日のわが国が抱えている多くの問題は岡氏の時代とは比較にならないほど深刻で、看過できない状況にある。巷には低俗な情報

があふれ、人倫は地に落ちたかのような悲しむべき事件の続発を多くの人は岡氏同様に憂えている。それにもかかわらずこうした現象が後を絶たないというのが今の状況である。

もともと日本人は恵まれた自然環境の下で、四季折々の美しさをおして豊かで細やかな情操を育んできた。春は花を愛で、秋は月を歌に詠むなど固有の文化を育て、心を豊かにし、潤いのあるものにしてきた。その心を表現するために言葉を練り、磨き、豊かで美しい日本語を作り上げてきた。この豊かで美しい日本語を乗り物として穏やかな人間性が育まれてきた。時代を超えて貫いている縦糸にその時代その時代の横糸を織り込み、紡ぐことで調和のとれた日本の心といわれるものを築き上げ、今日まで営々と繋いできた。

ところが、今日では情報技術の進展や国際化などにより、一部には活字離れという現象が起こり、人々の生活様式は大きく変化し、情緒豊かな美しい日本語も、さらには日本人の心も大きく変わろうとしている。人の在り方を含め、多くの分野で先人の繋いできた文化が次の世代に繋がらないという状況も出てきている。今はまさに時代の縦糸が切れようとする危機に直面しているといわなければならない。

私たちは、時代が変わってもわが国がいつまでも情緒豊かな国であるよう、「このくにのありさまがひどく心配になって」という岡氏の憂いを、今こそ多くの人々の共通の思いとなして、美しい日本の言葉、日本の心を次の世代に渡さなければならない。そのためにも、美しい日本語を大切に、書物に親しむことを勧め、とりわけ古典作品へのいざないに努めていきたいものである。

目次

ニュース&トピックス……………2～4

【特集】

覚えていますか? 「やまびこ」……………5

【連載】

・読書団体紹介21……………6

・レファレンスコーナー……………6～7

みどりの図書館

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています